



目次

巻頭言 教育と出版の伝統	1
特集 新規導入のデータベースの紹介について	3
特集 新たに指定された貴重資料	5
本との出会いを楽しむ <第5回>	6
図書館に関する話題 <第5回>	7
Library News	8
図書館のグループ紹介	10
弘前大学出版会より新刊紹介	10
本学教員等著作寄贈図書・資料一覧	12

教育と出版の伝統



附属図書館長 長谷川 成一

新入生諸君、入学おめでとう。皆さんが、これから4年ないし6年間、勉学に励むことになる弘前の地について、私の専門(日本近世史)に関わる観点から、同市の文化・教育の基礎は、藩政時代に築かれたことを述べたいと思います。

弘前市は文化の薫り高い都市であると、よく言われます。それは、国指定・登録・選択・選定文化財が44件、重要美術品認定文化財が1件、青森県の指定文化財(県重宝を含む)が54件、弘前市指定文化財が141件、合計240件の文化財(『弘前の文化財』弘前市教育委員会 2010年)を持つ都市であることが大いに影響しているのは間違いありません。これほど豊かな文化財に恵まれている都市は、同規模の都市では稀な存在といえるでしょう。

それだけではありません。皆さんは、約200年前に総合大学とも呼べるような高等教育機関が弘前市にあったことをご存じでしょうか。

江戸時代、各藩では藩士とその子弟を教育するために藩直営の学校(藩校・藩学と称します)を設立しました。特に18世紀から19世紀にかけて、数多くの藩

校が創設されました。弘前藩では、寛政8年(1796)、藩校「稽古館」を弘前城追手門外東南、現在の追手門広場一帯に建設。校名は、『堯典』冒頭の「ここに古(いにしえ)の帝堯を稽(かんが)うるに」から命名されました。同年7月9日には、入学式を執り行い、約300名が入学しました。校舎は東西対称の平屋建てで、西に14歳以下の生徒が学ぶ養正堂、東に15歳以上が学ぶ志学堂が配されました(図1参照)。学問のレベルが向上すると、博習堂・審問堂・広業堂・成器堂と進みました。

稽古館では、経学・兵学・天文暦学・紀伝学・法律学・数学・書学・医学・雅楽・武芸を教え、教授陣は、当時儒学者として高名な山崎蘭洲ら一流の学者を揃えました。後には、江戸幕府の官学である昌平黌(東京大学の前身)の学頭を務めた黒瀧藤太らも名を連ねています。人件費を除いた藩校の運営費3000石は、実に弘前藩の領知高の7パーセント強に相当しました。藩がいかに力を入れ、藩校教育に期待したか、窺うことができるでしょう。後年、稽古館を承継した東奥義塾からは、陸羯南など近代日本の政治・外交・文

化に貢献した多くの逸材を輩出しました。

稽古館では教育だけでなく、出版という文化事業を実施したことが特筆されます。館内に彫刻方において、「稽古館蔵版」の奥付を持つ書物を印刷刊行(木版と活字版の2種類)しました。それを稽古館本と称します(図2参照)。出版書目は、『四書』『礼記』などの中国の古典や、弘前藩と関わりの深い山鹿素行の『中朝事実』『聖教要録』、藩校教授であった山崎蘭洲の漢詩文集『蘭洲先生遺稿』(図3参照)などでした。加えて、同館では、幕府天文方の指導を受けて、寛政10年(1798)から明治3年(1870)まで独自の暦を作成・印刷し、流布させました。これを「稽古館暦」といいます。このように、稽古館では教育と出版を平行して行い、その活動は現在でも注目すべき業績として研

究が続けられています。

周知のように弘前大学は、地方所在の中規模総合大学として、60年にわたる教育と研究の歴史を刻んできました。2004年6月には遠藤正彦学長の提唱のもとに弘前大学出版会を設立して、出版事業にも乗り出し、現在では70冊を超える出版物を世に送り出しています。教育と出版、これはまさに藩校稽古館が、約200年前に全国へ名を馳せた事業でした。弘前における教育と文化活動は、脈々として、現在に受け継がれているのではないのでしょうか。

【参考文献】

- ・長谷川成一『日本歴史叢書63 弘前藩』(吉川弘文館 2004年)
- ・『新編弘前市史 資料編3』(弘前市 2000年)
(はせがわ せいいち)

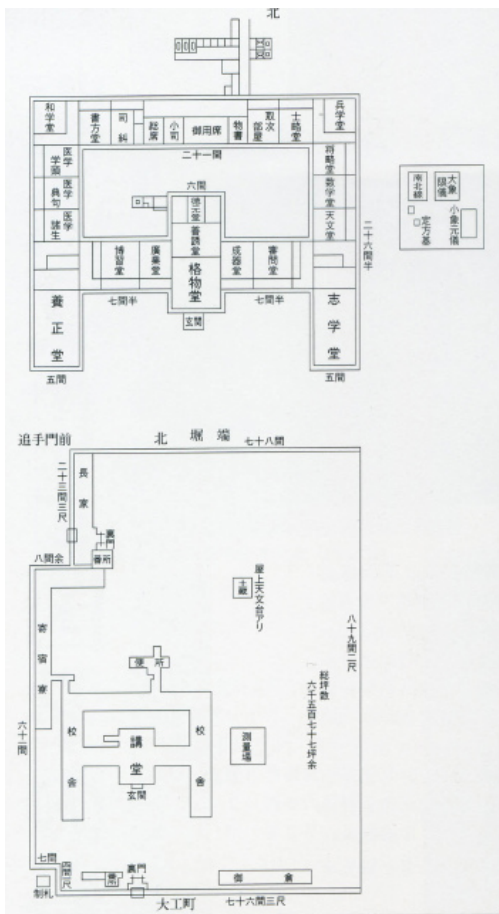


図1 稽古館の図
(『新編弘前市史 通史編3』
弘前市 2003年)



図2 稽古館本(弘前市立弘前図書館蔵)



図3 『蘭洲先生遺稿』と奥付
(弘前市立弘前図書館蔵)